

勝福寺「御名を聞く会」法話

親鸞さま なぜ お念仏なの？

― 発遣と招喚の呼び声 ―

宮岳文隆師（由布市・心光寺住職）

（二〇二〇年八月二十八日）

## はじめに

はじめに三帰依文を唱えさせていただきます。

最初に、自己紹介をするように、ということですので、簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は湯布院の心光寺という山の中の小さなお寺の住職でございます。こちらのご住職の藤谷知道さん、それから坊守さまの純子さんにはいろんな意味で深い教えを頂いております。

藤谷純子さんは、こちらにおみえになる以前の鶴谷純子さんというお名前の時から、本山から出ている『同朋』という雑誌に信国先生にお会いなさった時のことが出ていて、それを読んで、こういう人がおられるのかとかねがね尊敬しておりました。

知道さんとは、九州教学研究所・日豊分室ができた時、もう三十何年も前のことですけど、渋谷円さんが室長で、藤谷知道さんが主事で、私と村上匡一さんが主任研究員で、二期六年間共に学びました。

勝福寺さんでは御縁忌に向けて二年間お待ち受け聞法会がありましたね。最初の一年間は知道さんと純子さんがそれぞれお話しになり、後半の一年間は外部から先生方をお呼びになられ、さらに御縁

忌法要当日に二人の先生のご法話がありましたですね。それが『御縁忌法話集』という冊子になって、皆さま方もお読みになっていると思いますけど、私も読ませて頂きました。

今日は御遠忌も終わり、通常の「御名を聞く会」になっての第一回目ということでございます。ご住職さんからテーマを聞かれました、皆さん方が「親鸞さまなぜ お念仏なの？」というテーマで二年間聞法してこられたわけですので、私もそれを受けまして「親鸞さまなぜ お念仏なの？」を講題にあげさせていただき、副題として「発遣はつけんと招喚しょうかんの呼び声」という題をつけさせていただきました。

### なぜ念仏なのかを命がけで問いに来られた弟子たち

皆さま方二年間、「親鸞さまなぜお念仏のですか」という問いのもとに聞法を重ねてこられました、どうですか。何かうなずきというか、それぞれ、あるかと思うんですね。この問いは本当に根本的な大事なテーマだと思います。

まずそれを、親鸞聖人に尋ねてみますと、『歎異抄』の第二章『真宗聖典』六二六頁がまさにそれです。関東からお弟子さん方が命がけで問うておられるわけです。

「おのおの十余か国のさかいをこえて、**身命**をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御**こころ**ざし、ひとえに往生極楽のみちをとききかんがためなり」。

その問いというのが、なぜ念仏なのか、本当に念仏で助かるのですか、ということですが。

「しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をも知りたるらんと、こころに**くおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり**」。

関東の門弟からの問いは出ていませんけれども、親鸞聖人のそれに応ずる言葉から、どういう問いであつたかが分かります。それは「親鸞さまなぜお念仏なのです。本当にお念仏で助かるのですか」ということです。

その背景には、一つは、日蓮聖人は、「念仏したら地獄に墮ちる」と言っているけども、本当に念仏で浄土に生まれられるのか、もしかしたら、日蓮上人の言われるように地獄に墮ちてしまうのではなからうか。そういう疑問があります。もう一つは、あなたの息子の善鸞さまが、「私は父親から一人こつそり夜更けに念仏以外の法文を聞いている」とか「念仏はしほめる花である」とかおっしゃっているが、その法文を私どもにも聞かせて下さいと。

このような、お弟子さん方にとって切実な疑問にかりたてられて、まさにこの御縁忌のテーマであります「親鸞さまなぜお念仏ですか」という問いを、お弟子さんたちは命がけではるばる関東から

問いに来ておられるのです。

### 「別の子細なきなり」

それに対する親鸞聖人のお答えはね、皆さま方もご存知のように、念仏よりほかに往生のみちを知っているとか、また法文を知っているとか、もしそう思っておられるなら、大変な間違いだと。もしそうなら、比叡山や奈良に行つて聞いて下さいと。そして

「**親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり**」

と、お応えになられた。

「なぜ念仏なのです」と、私たちが問うとき、やっぱり念仏で往生できる「子細」をたずねておるんですね。お弟子さん方もそうなんです。おそらく、皆さん方もそうではないかと思えます。「子細」とは訳、理由、納得できる理由。聞いたら、「ああそうか、それ称えよう」と。人間というものは、理性をもっておりまして、理性や分別で納得できる「子細」を聞きたいわけです。

ところが親鸞聖人は「子細がない」と。ここに根本的な違いがありますね。弟子も命がけですから、

親鸞聖人もギリギリのところをおっしゃっておられるのです。

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」

と、こうおっしゃっておられます。「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」は法然上人のおおせですね。発遣の声です。それを「かぶりて、信ずるよりほかに別の子細なきなり」

と。ここがわたしどもの一番わからんところですよ。しかし、そこが「なぜ念仏なのか」についての親鸞聖人における一番要になるところだと思います。長いこと、私はそのところが分かりませんでした。今日は、そのところを尋ねてみたいと思います。

### なぜ念仏なのかについての二つの了解

親鸞聖人は、この後、「たとい、法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう」とおっしゃっています。もし私が、法然上人にだまされて念仏したために地獄におちたとしても、私は一向に後悔はないと。

なぜかという、「**自余の行もはげみて、仏になるべかりける身が、念仏をもうして、地獄にもお**

**ちてそうらわばこそ、すかされたてまつりて、という後悔もそうらわめ。いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と。**

ここに「身」という言葉が二つ出きます。「自余の行もはげみて、仏になるべかりける身」と「いずれの行もおよびがたき身」と。同じ「身」ということばが使われていますけど、決定的に違う。なぜ地獄に落ちても後悔しないと云えたのかということについて、私は、ここが一番のポイントだろうと思っています。

ところで、「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」という言葉には二つの了解の仕方があると思うのです。

一つは、この人が言うのだから間違いないと。法然上人を信賴しているわけですから聞いていこう、と。要するに、信賴する人がおっしゃっているから、念仏する。それでだまされても後悔しない、と。こういうふうな受け取る方が多いように思いますが、私はそれに納得できなかった。

どんなに信賴する先生であろうと、人が言うことを無条件に信ずるということが本当の信心なのか、それは盲信とどこが違うのか、と。オウム真理教の信者達は麻原彰晃が言うんだから間違いないと、こう言ったわけですよ。それとどこに区別があるか。どんなに立派な、たとえお釈迦さんであろうと、信賴する人がそう言っているんだから従っていこうという立場は、それが本当の信心だろうか

納得できませんでした。

もう一つは、どの道も駄目なのだから、たとえこの人の勧めた道を行って駄目であったとしても後悔しないと決着されたら、そういう了解があります。

今井雅晴先生いまいまさはるという筑波大学の歴史の先生がいます。親鸞聖人のご生涯について色々研究しておられて、日豊教区にもお見えになりました。私も聞かせて頂きましたが、人柄の良い先生で、私も大好きなんです。

この先生が『わが心の歎異抄』という本を十年くらい前に出されました。その本の中で、「なぜ念仏なのか」ということを今井雅晴先生の言葉でおっしゃっています。今回ここに来るのにあたって『わが心の歎異抄』を搜したんだけど、ちょっと見つからなかった。地震でバラバラになって、本があちこち分散して、搜すだけでもエネルギーがいるんです。それで自分の記憶だけで言いますので間違っているかもしれません。

今井先生は筑波大学を卒業されていっぺん他の職業につき家庭ももたれたんですが、自分は研究者の道を歩もうと一大決心をして、また大学に戻られたんです。先生は、いい論文を書いて認められないと自分の生活がなりたって行きませんから、必死なんです。しかし、なかなか良い論文が書けず、焦っていました。その時に、たまたま研究仲間の結婚式で尊敬する先生の隣りに座ることがめぐまれ

ました。それがきっかけで、その先生の勉強会に行くようになり、先生の「なかなかいいよ」と言うてくれることが励ましになって研究が進むようになったそうです。

その時、自分はこの先生について行くしかない。この先生について行って駄目なら、もともと駄目なんだから、それは仕方がないと、こういう決着がついたそうです。その時の想い出を重ねながら、『歎異抄』第二章の親鸞聖人の言葉を語っておられました。

『歎異抄』第二章は、たしかに、そういう受け止めることができますね。親鸞聖人は、「たとえ法然上人にだまされて念仏して地獄に堕ちても後悔はしない」と言っておられます。普通、地獄に堕ちたら後悔しますけど、後悔しないと。なぜか。

「そのゆえは、**自余じよの行もはげみて、仏になるべかりける身が、念仏をもうして、地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたてまつりて、という後悔もそうらわめ。いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし**」と。その理由は、念仏以外の行を励んで仏に成ることができた身が、念仏申して地獄に堕ちたというものであれば、だまされたという後悔もありましょう。しかし、自分は、もう念仏以外の行をしても地獄行きしかない。だから、念仏して地獄に行っても後悔しないと。こういう決着の仕方がありますね。

『歎異抄』第二章の親鸞聖人の決着についての了解には、大体この二つがあると思います。しかし、

このいずれも、人間の判断の範囲内においての了解の仕方であろうと思います。

皆さん方はどう思われますか。教学的に言いますと、真宗の一番大事なところは、第十七願の「諸仏しよぶつ称名しょうみやうの願」と、「聞其名号もんじなごう、信心しんじん歡喜かんぎ」という第十八願成就文のところす。

諸仏とは自分の出遇であったよき人。そのよき人が、「行き場のなかった自分が、阿弥陀仏・法蔵菩薩の自分を呼ぶ声に出遇って救われたんです！」と、念仏（＝阿弥陀仏・法蔵菩薩の呼び声）を称たえておられるわけですが、よき人が出遇われたその阿弥陀仏・法蔵菩薩の呼び声は、行き場を失って迷っているこの私をもまた呼んでいるのです。その阿弥陀仏・法蔵菩薩の呼び声が、行き場を失っている私の心に届いて、信心歡喜するのが第十八願成就の信心です。

教学的には、そういうように十七願と十八願との関係になりますし、親鸞聖人の歩みのところで言いますと、この『歎異抄』第二章ですね。ここが一番大事なところだと思っんです。このところを、どのように受け止めていくかという問題にかかわってきます。

### 親鸞聖人が出遇われたもの

私ですね、「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおお

せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」という言葉の「親鸞におきては」とあるところを、「法然におきては」と置き換えて読むと納得できるんです。

法然上人にとってのよき人は善導大師ですね。善導大師の「一心いつしん専念せんねん 弥陀みだ名号みやうごう」という言葉に法然上人は出遇われたわけです。そして「よき人（善導）の教えをかぶって信ずる」と、このように法然上人はおっしゃっておられるわけです。そういう法然上人に、親鸞聖人は出遇われたのです。

親鸞聖人は九才の時から二十九才まで、本当に命がけて比叡山で仏道の修行をなさった。けれども行きづまって、法然上人のもとへ行かれたわけです。この先どんなにやっても、この比叡山では自分に道が開けるといふことはもうできないと決着がついた。だけど、どこに行ってもいいか分からなかった。それで六角堂に百日こもってね、九十五日目の暁に夢告をうけ、それからまた法然上人の所に百日のあいだ聞法に通われたわけでしょう。

その百日の聞法の中で法然上人がおっしゃっておられたのが、これなんです。「戒定慧の三学に行き詰った私は、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし、というよき人善導の言葉に出遇って、本当に救われたんです」と。これを、くり返しくり返し、法然上人はおっしゃっておられた。

『歎異抄』の文面では、「念仏しなさい」と言っているようになっていきますけれども、それは口業説法ですね。口で説法するのを口業説法くごうせつぽうといひます。しかし、その姿が説法しておられるというこ

とがあります。それを身業説法しんごうせっぽうといひます。

それは、「自分はどこにも行き場がなかった。その行き場のない自分に、四十三歳の時に、『一心専念いっしんせんねん 弥陀名号みだみょうごう』という善導大師の声こゑが聞こえてきたのです」と。実は、善導大師もまた、その声に出遇っておられるのです。

ともかく行き場のない自分に聞こえてきた善導の「一心専念 弥陀名号」の呼びかけは、本当は善導大師の声ではなかった。それは善導大師も聞かれた本願の声だったので。『一心専念いっしんせんねん 弥陀名号みだみょうごう』の呼びかけに順うのは『順彼仏願故じゅんびぶつがんこ』である」と、つまり「本願の呼び声に順う故である」と、こう善導大師ご自身が書いておられます。法然上人には、その「順彼仏願故じゅんびぶつがんこ」という言葉が決定的だったので。伝記には、『順彼仏願故じゅんびぶつがんこ』の文、ふかくたましいにそみ、心にとどめたるなり』（聖光しょうこう『徹選択集』）と書かれています。

ですからね、法然上人は、本願の呼び声に遇うたんです。行き場を失って身動きができなかった法然上人に、「そのお前を待っているんだ。もう行をせんでもいい。そのまんまのお前でいいんだ。そのまんまのお前を私は待ち続けておったぞ」と、そういう本願の呼び声こゑが聞こえてきたんです。

これは人間の声ではありませんですね。それを招喚しょうかんの声（自己の内からの声）といひます。「私もこの声を聞いたんだ、だからあなたもこの声を聞いておくれ」と。それをよき人の発遣はつけんの声といひます。

その発遣はつけんの声の上に、弥陀の招喚しょうかんの声を聞きとられたのです。ですから『歎異抄』第二章は、「法然はつぜんにおきては、ただ念仏して、弥陀みだにたすけられまいらすべしと、よき人善導大師のおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細こさいなきなり」と、このことひとつをくりかえしおっしゃる、そういう法然上人に私は出遇ったんです、と、そう親鸞聖人しんらんがおっしゃっておられるのです。

もし「念仏しなさい」だけだったら百日間も通う必要はないですね。法然上人は、いつ行っても「ただ念仏しなさい」というだけです、それだけだったら、すぐ覚えて、後は、ただそれを実践するしかないでしょう。

しかし、その心はどこにあるのかということになると、親鸞聖人は分からなかったと思うのです。それを本当に聞き続けてね、百日聞き続けて、ついに、法然上人が出遇われた弥陀の招喚しょうかんの声というものに、法然上人の姿を通して、親鸞聖人は出遇われたんだと思うんです。

### 無条件の呼びかけ

ですから「なぜ念仏なのか」というのは、もう人間の分別とか理性を介しない。本願の声というの

は、「こうこう、こうだから、こうだ。だから信じなさい」というような人間の思慮分別を介さない。親鸞聖人はそれを「勅命<sup>ちよくめい</sup>」と言っています。本願招喚の勅命と。勅命というのは理屈ではない、無条件の命令、呼びかけです。

哲学なんかでも、カントは、命令に二種類あると言っています。一つは、かげんめいほう仮言命法。命令にあたって条件がある。「あなたが本当に大学に行きたいなら、勉強しなさい」、或いは「あなたが本当に浄土に生れたかったら、念仏しなさい」というように。これを仮言命法と言います。これは、人間の思慮分別を介しています。

ところが、もう一つ、カントはていげんめいほう定言命法ということを行います。これはもう無条件。あなたが欲するなら、こうしなさい、というような条件がない。ともかくしなさいと、こういうふう<sup>に</sup>に人間の思慮分別を一切介していないのが定言命法です。まさに勅命は定言命法です。理性分別以前の、理性分別よりもっと深い所から促してくるいのちの呼びかけです。「本当に浄土に行きたかったら念仏しなさい」とか、「たすかりかかったら念仏しなさい」、そんなもんじゃない。ともかく、「念仏せよ!」「来たれ!」。これを親鸞聖人は本願招喚の勅命と言っています。「帰命は本願招喚の勅命なり」と。理性分別でしか生きられない私どもには、そこに飛躍があるもんですから、その所がなかなか分からないのです。

### 「春逝く人」

佐野明弘先生から、うちの報恩講で聞かせていただき、私の心に残っている話があります。それは「春逝く人」(春に亡くなつて行った人)というほうしそうん蓬茨祖運先生が書かれた文章です。その原文を大谷大学に行つて探し当て、読ましていただきました。

短い文章ですけど、どういう事かという、昔は春、農耕する時、農耕馬でやっていた。ところが馬が暴れて、若者が胸を強く蹴られて肺浸潤になり、明日をも知れぬ命になった。それで村の老人三人が若い住職であった蓬茨祖運先生の所にやって来て、「若者があなたに聞きたいことがあると言っている、行ってやってくれんじやろうか」と頼まれた。先生はまだ若い住職だった時で、明日をも知れん人に話すことができるような持ち合わせもなかったけど、「わかった」と自転車で行つたそうです。

六キ位離れたその家に行ったら、誰も居ない。三才と八才くらいの男の子がかまう人もなく遊んでおる。家の人は居ないのかと聞いたら、みんなは二階に集まっておると。二階に上がって行ったら、そこに皆が集まっておって、自分を呼びに来た三人の老人もいた。枕元にはお父さんと奥さんがいた。

「どうぞ」と枕元に案内してくれたので、顔を見たら、ものすごく痩せ衰えて、声もよく聞き取れないような感じだった。その青年に「あなたは私に何か聞きたいことがあるのか」と聞いたら、「何も聞きたいことはない」と言うので、先生も啞然とした。「聞きたいことがあるというので来たのだが、なければそれもけっこうだ」と言ったら、「いやそれは、村の年寄り三人が毎日来て、苦しいのはいましばらくだ。もうすぐけっこうな浄土に生まれるのだから念仏申せという。自分はなぜ念仏申さねばならないのか、念仏申すとなぜ浄土に生まれるのか。それが自分にはわからないというので、あなたを呼びに行ったのでしよう」と答えた。事情は分かったが、先生は、どうしたものだろうと考えあぐねていると、その青年が、「あなたに聞きたい。なぜ念仏したら浄土に生まれるんですか？」と、こう聞かえてきたんです。

先生は、教えはこうだとか言えんこともないけれども、そういう事を言うような場面でもなかったので、「それはわしも分らん。逆にあなたに私はお聞きしたい。あんたの今の本当の気持ちを聞かせてくれ」と問い返した。そうしたらその若者は、「私の気持ちは、浄土へなんかに行きたくない。ただ死にたくない。それしかない」と。それで先生はどう答えたかというのと、「それでも死んでいかんならんのやろ」と。若者は「そうや。だから苦しいんや」と。先生は、「ならまず称えよ。なぜ念仏称えたら浄土に行けるのか、そのわけが分かってから称えるというのなら、もう称える時はないだろう」と。

次が大事なんですね。「それは、あなたがどんなに死にとうないと思っても、死なんならんのと変わらんじやないか。はからいなく称えることが、かえって念仏のいわれにかなうのじやないのか」と。そしたらね、その若者がしばらくじーっとしたけど、「分かりました」と。それから、痩せ衰えた胸に手を合わせて、「ナンマンダブツ、ナンマンダブツ、ナンマンダブツ」とお念仏を称えだしたということです。

それを見たら蓬茨先生も涙がこみ上げて来て、「じゃ、私はこれでおいとまします」と階下に降りたら、その青年の子供二人が誰にもかまってもえらずにウロウロ遊んでいる。それを見たら「死にとうない。それしかない」と言った若者の心が思い出されて、また涙がこみあげてきたそうです。

翌日、その村の老人三人が来て、あの若者が亡くなったので葬式してくれと。葬式が終わったら、その三人が来て、「有り難うございました。あの若者はあの後、念仏をずーっと称えて、皆さんに長い間の看病のお礼を言って、安らかに亡くなって行きました。みんな悲しみの内にも救われる思いがしております。有り難うございました」と、お礼を申したそうです。

この「春逝く人」の最後はどういうふうに終わっているかというのと、あの若者は「分かりました」と言っただけでも、私は分かるような事を言った覚えはない。だけれども、あの若者は「分かりました」の一言を残して死んでいった。何が分かったのかと本当は聞きたかったけれども、そういうこと

を聞くような場面でもなかった。それで、あの若者は何が分かったのか、その「分かりました」の秘密を尋ねたくて、自分は勉強を始めた。あれから何十年たって、今振り返ってみると、あの若者は自分の善知識だったと。そういう言葉で「春逝く人」を結んでいるんです。

### 「それでも死んでいかんならん身」に念仏の呼びかけが届いた

この話は「親鸞さまなぜ お念仏なの？」と通じると思うのですよ。私は蓬茨先生のその文章を折に触れては読むんですけど、大事なところは、「浄土なんて行きたくない。私は死にとうないんだ」と言う若者に対して、先生が「それでも死んでゆかんならんやろ」と言ったら「そうや、それが苦しいんです」「なら、ただ称えよ。それは、あなたがどんなに死にとうないと思っても、死なんならんのと変わらんじやないか」と言ったら、若者が「分かりました」と言ったところですよ。「それ」とは、「ただ称えよ」の呼び声です。

その若者にどういものが届いたのか。それは法然上人や親鸞聖人が聞き取られたものと同じものだったと思うんです。どうしても死にたくないわけですね、その若者は。だけでも死んで行かんならん。これはいかんともしがたい。「いづれの行もおよびがたき身」ということを親鸞聖人はおっしゃ

いますが、まさに思いとしては死にたくないわけです。だけでも死んでゆかんならん。これは身の事実です。それに対して蓬茨先生は、「なら、ただ称えよ。わけが分かってから念仏称えるんだったら、もう称える時はなからう。それは、死にたくないどんなに思うても、それが役に立たずに死なねばならぬのと変わらんじやろう」と言ったら、「分かりました」と言ったんですね。

つまり「ただ称えよ」という呼び声は、どんな思いも間に合わない身とピタリと一つになって、そういう身と運命を共にする声なんです。そこに、人間の思慮分別が介在する余地はありません。

### 一切の法論が間に合わない身と呼んでいる声

法然上人は頭のいい人で、あらゆる勉強をしつくしたけれども、それでも助かるということが見いだせなかった。本当に「いづれの行もおよびがたき身」というところに行き詰って、一切経がおさまっている経蔵に入って、泣く泣く手に取ったのが『観経疏』かんぎょうしよだった。その『観経疏』の中の「一心専念 弥陀名号」の一句が、雷のように法然上人に響いた。それは、本願の呼び声だったので。親鸞聖人も比叡山で二十年間行き詰まってね、六角堂に参籠し、夢告を受けた。六角堂の夢告にヒ

ントをうけて、それで法然上人に出遇うことになった。

私どもは人間の思慮分別で生きていますけれども、それが間にあわんことが有りますよね。

「いずれの行もおよびがたき身」、もう人間の論理では間に合わないわけです。そこで聞こえてきたのが如来の勅命です。如来の勅命というものは、そういう者にこそ呼びかけているわけです。そこに、人間の思慮分別は一切介在していません。そういう身とピタリと一体になっている声なんです。ね。「そういうあなたを待っている」と。その声によって、初めてわれらは「いずれの行もおよびがたき身」「地獄一定の身」に帰れるんですね。

ここで一度、休憩をさせていただきます。

### 隣家の失火で家が全焼した時の安田先生の言葉

「かざはな通信」に、こちらの坊守さんが毎回面白い深いご案内を書いておられます。今回のご案内（No 92）には、安田理深先生の言葉が出ていました。これは私の学生時代の頃のこと、安田先生の家が焼けたんですね。隣りの家の失火で全焼しました。

安田先生はお金があれば本を買う方で、万巻の書でした。全部、いのちみたいなものでしたが、それが全部焼けたんです。家も焼けましたが、先生にとって本が焼けたことが痛かったと思います。そ

れも隣りの家の失火です。やっぱりショックだったと思いますけど、そういうところを潜<sup>く</sup>って先生は「自分に責任がある」と仰ったんです。

みなさん、これは理解できませんよね。普通だったら損害賠償の請求とかするところです。自分にはなんの責任もないわけですから。隣りの失火で焼けたわけですから。それなのに、「自分に責任がある」と仰った。これはね、人間の理性分別では絶対出てこない。それを純子さんが書いてくださったんですね。

**「彼は加害者、私は被害者で責任はない、というところで、ようやく自分を引き受けられる。これが世間道というものかもしれない。しかし自分におかれた現実を他人事として生きる時、自分の人生を生きる事になっているだろうか？」**。これを読ませていただいて、なるほどなあと思いました。私共の分別理性というのは自分の人生を他人事として見ているんですね。

### 万法唯識という教学に隠されている強烈な意志

一昨日だったか、部屋で本を読んでおいたら、裏山に雨が降っていました、そこをぼーっと見ておいたら、動くものがあるんです。何だろうかあと見たら、毛虫が葉っぱの下を蠢<sup>うごめ</sup>いていた。それで、

ふと変な事を思ったんですね。

唯識教学というのがあって、私どもの意識は、見るとか感じるとか思うとか、前六識といますけど、それが全てと思つています。ところがその前六識を、意識されない深いところが支えている。その無意識の層に第七末那識まなしき、さらに第八阿頼那識あらやしきがあるというのです。唯識ではこういう八層で人間を考えてます。

阿頼耶（アラヤ）というのは「蔵」という意味です。「ヒマラヤ」と言えば「雪の蔵」です。この阿頼耶識が私達の深い所にあつて、そこに私共が過去に経験してきたことの一切が種子しゅうじとして全部溜め込まれている。それで、私どもが現在経験することは、種子として阿頼耶識に溜め込まれていた過去の経験が現れてきたものである、というのですね。それを種子生現しゅうじしょうげんぎょう行ぎょうといいます。種子が現行してきたものが私共の現実だということです。なかなか信じられないですね。

私どもの意識からすれば、世界はみんな共通でしょう。私が死んでも世界はあるしね。私にもAさんにもBさんにもCさんにも世界は共通に有ると思つてます。ところが唯識はそんな事はないというんです。みんなそれぞれの識でしかない。それぞれの識が現れているだけなんだと。そんなこと、ちよつと信じられませんですよ。

興福寺なんかはその唯識の宗派ですけども、こんな笑い話があるんです。和尚さんが蜜を隠し持つていて、ちよこちよ食べていた。小僧さんはそれを知つて、和尚さんが出かけた時に食べてしまった。和尚さんが夜遅く帰つてきて、「ここにあつた蜜をおまえ食べたやろう」と言つたら、「いや、私の識の中の蜜を食べたんで、和尚さんの識にある蜜を食べたのでありません」と。共通して蜜が有るのではなくて、私の識の中に現れた蜜を食べたのであつて、和尚さんの蜜は食べてませんよと。

まあ笑い話ですけどね。そういう素朴な疑問は当然起こりますよね。私もなかなか信じられません、今でもね。しかし唯識はそういうことを主張するんですよ、「万法唯識まんぼうゆいしき」と。「唯識無境」といつて、私が見ている世界は、私の識の現れなのであつて、外にそんな客観的な世界が存在しているわけではないと。だから私が死ねば世界があるということはないと。

それでね、毛虫を見とつて、純子さんの話となぜか結び合つたんです。まあ、毛虫が這うという事は私と関係ないでしょう、本当はね。だけでも、それも自分の識の現れだと唯識が主張するということは、実は一切合切を自分の事として、他人事としてではなくて、自分の人生として生きるということです。

他人事というのは、自分と関係ない第三者的なこと。安田先生が火事にあつたわけですが、類焼ですから、自分に責任はないですよ。しかし、だからといって、その責任をどこまで追求していつても、救われないでしょう。もう家も本も帰つてこないわけですから。焼けたという事実を本当に引き

受けていくしかない。客観的には責任がないんだけど、それでも自分に責任があると。これは焼けたという厳然とした事実を自分の人生として受けとめて、生きていこうという、いのちの強烈な意欲の現れなのです。

唯識の教えは、あらゆる事を他人事として見ずに、たとえ自分に無関係の毛虫が這うような、自然界の物理的、客観的な出来事さえも、それも自分の過去の経験したことの現れとして見ようという教学なのかもしれないぞと思ったんです。それで、この教えは凄いなあと思ったんです。どんな事であろうとも、他人事として見ない。自分の経験する一切を自分の事として見ようという、そういう強烈な意志がああいう教学にまでなっているんだと思っただけです。万法唯識ということは、自分がこの世に生まれて死ぬまでに経験する一切適切を、他人事とせず、全て自分が過去に経験したことの現れとして、宿業として、受け取っていいこうという強烈な意志が、ああいう壮大な教学体系までなっているんだなあと思いましたね。

### 曾我量深先生の「宿業です！」の叫び

そがりようじん  
曾我量深という先生は九十六歳でお亡くなりになりましたけど、八十六歳の時、大谷大学の学長

を拝命したんです。任期は四年で、九十歳でやっと学長の重責を終えられた。やれやれですよ。ところが次期学長を決める教授会において、もう一度、曾我先生にお願いしようということになったんです。信じられませんか。ともかく、そう教授会で決まったんです。ですけど、さすがに先生にもう一期お願いしませうなどと、そんなお願いは誰も荷が重過ぎて、頼みにはよう行かんわけです。結局、教授達の中で曾我先生の一番弟子とも言える松原祐善先生がお願いに行くことになったんです。松原先生は重い足を引かずで行ったわけです。その時の事を、曾我先生と一緒に住んで身の回りの世話をされていた故小林光麿先生からお聞きしました。

松原先生が「先生もう一期、学長をお願いします」と重い口を開いたら、曾我先生は「ウーン」と言ったなり一言も言葉を発することができず、ただうつぶいいて「ウーン」と、その沈黙が二十分位続いただろうというんです。二十分位経ってから、曾我先生が「宿業です！」と、こう一言言われたそうです。「引き受けました」ということです。

それを、すぐ側で聞いておられた光麿先生は、「宿業とはこういう事だったんか！」と。普通は宿業とは運命とか仕方がないことと思われているけれど、そんなんじゃない。立ち上がる。逃れられないものを引き受けて立つ。人間の声じゃないですよ。まさに自分の中の法蔵菩薩が、自の理性分別を破って現れて、代わってもらえない人生を引き受けて立つんです。

私共はそれを他人事として、なんでこんな目に会わないかんかったんだろうかと、補償をどうするのかとか、そういうことを言いますが、しかし、それで自分の人生が変わるわけじゃないですよ。この現実を引き受けていくという、これが宿業ということの本当の意味です。理屈じゃないんですね、それは。

### 代わってもらえない人生を生きている人

私は今年になってフェイスブックを始めまして、そのフェイスブック友達の日田の櫻木さんという方から、今度、『雪冤』<sup>せつえん</sup>という題で、狭山事件の石川一雄さんと袴田事件の袴田巖さんのドキュメンタリーが放送されると教えてもらいました。無実であることを明らかにする事を雪冤というんだそうです。

その『雪冤』という題のドキュメンタリーですが、袴田さんは、一貫して無実を叫び続けているのですが、一旦は「やりました」と自白したんです。人間って弱いものですね。なんで、やってないに、「やった」と言うんだらうかと、私どもの常識ではそう思うでしょう。それほど取り調べが過酷で、ついつい辛くて言ってしまうそうです。

それは一九六六年（昭和四十一年）に一家四人が殺された事件です。焼け跡から四人の死体が出てきて、それが他殺体だった。それで警察は、その従業員だった元ボクサーの袴田巖<sup>はかまだいわお</sup>さんを犯人に仕立て上げ、厳しい取り調べの結果、袴田さんはそれに耐えきれず、とうとう一度自白してしまうんです。

しかし、その後は一貫して、やってないと五十四年間無実を叫び続けています。一九八〇年（昭和五十五年）に最高裁で死刑判決が出て確定していますが、何度も再審請求をし続けています。二〇一四年（平成二十六年）に静岡地裁で再審開始の決定と死刑・拘禁の執行停止が決定され、その時から釈放されて、今はお姉さんの所にいます。けれども、二〇一八年（平成三十年）に東京高裁は静岡地裁の決定を取り消しました。それで、現在最高裁に高裁の決定に対する特別抗告を提出して今も審議中です。

そのお姉さんが凄いです。袴田秀子さんという人ですね。この人の両親はね、一番末っ子の袴田巖さんの無実を信じていましたけど、それが晴らされないまま死んでいった。それで、両親のためにも、どうしても弟の無実を勝ち取るんだと、それに自分の人生を賭けているんです。

ギネスブックにも「世界で最も長く収監された死刑囚」としてに載ったことがあるらしいです。死刑の執行は、前もって通告されず、その日の朝になって言われるんですね。だから毎日朝になると、

今日は死刑執行の命令がおりののではないかと脅<sup>おび</sup>えながら朝を迎えるそうです。それがずっと続くものですから、精神がおかしくなるんですね。そういうのを拘禁症状というらしいですけど、袴田さんはそれになっているそうです。

それで、お金が少しもらえてね、今まで刑務所だったのでお金を自由に使うことはできなかったからか、お金の使い方が凄<sup>おそろ</sup>いんですよ。どこへ行って買い物しても、壱万円出して「釣りいらん」と言うんです。テレビで、お姉さんと二人でラーメン食べに行くところが映っていましたが、食べ終わると、壱万円出して「釣りいらんよ」と言って帰られました。お姉さんは、最初はそんな無駄使いするかと怒っていたんですけど、今は、「自由になった証<sup>あかし</sup>でそうしたいんだから、させている」と、そして「もし、お金が無くなったら、無くなった時や」と、お姉さんは言ってるんですよ。そう言った弟の辛さが分るから、そのまま受け止めているんですね。お姉さんも凄<sup>おそろ</sup>いなあと思ってますね。

それからもう一人は石川一雄さん。この方は狭山事件です。私も学生時代、部落差別の象徴みたいにして学びました。一九六三年（昭和三十八年）に、女子高生が誘拐されて殺された事件です。近くの被差別部落に住んでいた石川一雄さんが犯人に仕立て上げられました。石川さんも、一審では、自白した為に、一九六四年（昭和三十九年）に死刑判決が出されるのですけど、その後はずっと今日まで無実を叫んでいて、それを奥さんが支えています。上告しましたが、一九七四年（昭和四十九年）

に、高裁で無期懲役の判決が出され、その後上告、一九七七年（昭和五十二年）上告棄却、無期刑確定。その後は第一次、第二次と再審申し立てをしますが、いずれも棄却され、現在は第三次再審申し立て中です。一九九四年（平成六年）に仮釈放され、現在は自宅におられます。

その石川一雄さんを初めてテレビで見ましたけど、ものすごく明るいですわ。今、八十一歳。袴田さんは八十四歳。びっくりしましたね。やっていないのに、死刑や無期刑の囚人にされ、その無実を晴らすことに生涯のほぼ全てが費やされているんです。「濡れ衣の罪で一生を棒に振ってしまっただ」と嘆いて終ってもおかしくないところですが、自暴自棄にならず、無実の罪を晴らそうと、懸命に前向きに生きている。そういう二人、それからそれを支えるお姉さん。袴田秀子さんは、自分の弟の無念な思いを受け止めて、拘禁症状で精神に異常をきたしていることも全部受け止めて、支えています。「それが自分の人生だ」という覚悟を生きていて、もう迷いがないんですね。感動しました。

なんかね、代わってもらえんでしょう。「弟が無実の罪でいまだに苦しんでいる。だから私は、その無実を証明することを自分の人生として生きるんだ」と。お姉さんは嫁にも行かず、末の弟の無実を晴らすことを自分の生涯にするという覚悟が現れていましたね。覚悟やね。代わってもらえない人生を、自分の人生として生きるよ。

考えてみたら、私どもみんな、そうなんです。みんな、それぞれ境遇が違うけど、みんな、代わっ

てもらふことはできませんよね。代わってもらえない人生を、他人事として生きている人もおるでしょう。だけでも、それがもう間に合わんようになった。

「春逝く人」の青年がそうだった。死にとうなかつた。だけでも死んでゆかねばならなかつた。これはもう代わってもらえない。親鸞聖人もそうですね。そして法然上人も。だからああいう特殊な状況にある人達だけが代わってもらえないのではなくて、実は私も本当は、誰一人としてそうでない人生はない。他人事として生きておりますけれども、生老病死の身は誰にも代わってもらえないですね。

## 究極の倫理

ご本山にある「しんらん交流館」では毎週、日曜講演がありまして、それが「ともしび」という機関紙に載っています。この間、大谷大学の池上哲司という倫理学の先生の話が載っていて、非常に感銘を受けたんです。倫理学の先生だから、人間の行為について、こうすべきだということを学問としてやっておられる。

その倫理学の池上先生が「倫理の止まる場所」という題で話されていました。「人間はこうすべきだ」という事を追求していくんだけど、もうそれが立ち止まる場所がある。それは何かというと、「生老病死」です。

すでに生まれてきているのに、「生まれてくるべきではなかつた」と言えんでしょう。病気をしたのに、「おまえは病気をすべきじゃない」なんて、通用しません。病気になつとるのだから。年老いていくことを「年老いるべきでない」なんて言えません。死ぬることも、「死ぬべきではない」なんて通用しませんでしょう。だから生老病死の身においては、倫理が止まるんです。そういう事を池上先生が話しておられました。

実をいうと、四苦八苦もそうですわ。愛別離苦あいべつりくもそうです。我が子に死なれることも、「死ぬべきじゃない」と、いくら言い張つてもね、子どもが死んでいく。事実なんですわ。愛別離苦あいべつりくも怨憎会苦おんぞうえくも求不得苦ぐふとくも五蘊盛苦ごうんじょうくも、全部がそうですよ。そこでは倫理が止まるんです。

人間は自由に選択できる時は、「こうすべきだ」と、いろいろ言えるけれども、いよいよのところになったら倫理は止まってしまう。そこでの倫理を究極の倫理と池上先生は言っておられるんです。究極の倫理とは何だと思えますか。私は感銘を受けましたけどね。それは、そこにとどまるということだ、と。そうあらざるを得ずしてそうある事実に、じつととどまるということだと。

阿弥陀仏になる前の永い間の修行時代の名を法蔵菩薩というんですけど、その法蔵菩薩は阿弥陀仏

になったらそれでお終りかというのと、終わりじゃない。直ぐまた法蔵の修行時代にかえて、今度は  
兆 載永劫の修行をなさっているんです。

その法蔵菩薩は私ども一人一人の中におつてね、そして私どもの誰にもかわってもらえない身を、  
そこに止まり続けて受けとめている。私どもの意識においては他人事として生きていますけど、本当  
は「いずれの行もおよびがたき身」を生きていない人は一人もいない。いつか死んでいくわけです。  
そういうところをちゃんと見てね、善し悪しを言わずにじっと受け止めている。それが良いとか悪い  
とか言えないことを法蔵菩薩は知っている。「本当にあなたは苦勞なさっている」と、手を合わせて  
おられるんです。それが法蔵菩薩です。全部受け止めるんです。善し悪しを言わずに、そのまんまの  
私をだまっつてじっと受け止める。これが法蔵菩薩です。まさに池上先生のいう究極の倫理を生きてお  
られる仏さまです。

そして、これが念仏なんですね。念仏というのは、こうあるべきとか、こうあるべきではないとか、  
そういう行為、「行」の次元のものではない。私どもは誰にも代わってもらえないものを生きていて、  
やがて死んでいくわけですが、そこにじっと止まり続けておる法蔵魂、法蔵菩薩の呼び声、お心とい  
うか、どういう言葉がふさわしいか分かりませんが、ともかくずうつと止まり続けておる「いのち」、  
その呼び声が念仏なんです。

「どうにもならん身を生きるお前を引き受けていくよ」という声

そういう呼び声を「春逝く人」の青年は直感したんだと思うんですね。「どうしても死んでいかん  
ならんやろ」と。「そうや。それが苦しんや」と。「それならただ称えよ。それは、あんたがどん  
なに死にとうないと思うても死んでいかなならんのと同じやろ。はからいなく称えることがかえつ  
て念仏のいわれに適うのでないのか」と言ったら、「分かりました」と言っただけです。本当にどう  
にもならん身呼びかけているのが念仏だということが、理屈を超えて響いたんですね。

親鸞聖人もどうにもならんかった。法然上人もどうにもならんかった。そのような、どうにもなら  
ん身に呼びかけている。誰の中にもそういう声はあるんです。それが招喚の勅命です。

私どもは善し悪しを言うて生きてますけど、もう最後になったら、善し悪しが間に合わなくなる。  
善し悪しが間に合わなくなったこの身を、じっとそこから目を離さずに、じっとただ受け止めて、受  
け止めるだけでなく手を合やす、「ご苦勞さま」と。法蔵菩薩は私どもに「ご苦勞さま」と言ってお  
られる。

純子さんの以前の「かぎはな通信」に、何かのことで落ち込んだ時にね、声が聞こえてきたと。「お

まえを生きていくからね」という声を聞いた。それは人間の声じゃなかったと書いてあった。

私どもは他人事として逃げたいんです。なんでこんな目にあつたか。自分の人生でありながら、あたかも他人事であるように思っている。それでも逃げおせんわけでしょう。そんな時に、自分の声でないものがね、「おまえを生きていくからね」、「決して捨てずに生きていくからね」と。それで、涙が溢れたと書いてありましたね。

### 身口意の三業は表面、その底は悪性、それを受け止めているのが法蔵菩薩

曾我量深先生は「宿業本能、感応道交」と言われますが、本能として法蔵魂は誰の中にも流れている。

善導大師は、我々の身・口・意の三業というのは、全部「外」だと言い切っています。要するに、上っ面、表面にしかすぎないと。それを、こうすべきだとか、ああすべきだったとかと言って、上っ面のことに一生懸命、血眼になっっている。頭の先についた火を消し止めようとして走り回るほどに真剣になっても、何にも間に合わない、そう善導大師は言っています。

『教行信証』の「信巻」（真宗聖典二一五頁）に善導大師の至誠心積というのがあります。至誠心と

は人間のまことを尽くすということですが、そこを親鸞聖人は読み替えて「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ」、つまり、外がわに身口意の三業を整えて、まじめな修行者の姿をするなど。

なぜなら、「内に虚仮を懐いて」、虚仮、うそですね、「貧瞋邪偽、奸詐百端にして」、もううじやうじやしていてね、「悪性侵め難し、事、蛇蝎に同じ」、蛇や蝎と同じだと。「三業を起こすといえども名づけて雑毒の善とす、また虚仮の行と名づく、真実の業と名づけざるなり」と、こういうような事を言っています。

みなさん方、こういう話を聞かれると、なんで、親鸞聖人や善導大師は、そんなに絶望的なことを言われるのかなあとか、どうしてそれが救いと結びつくのかなあとか、そんな疑問をもたれると思んですね。

この辺はなかなか上手く言えないんですけど、私どもは深いところに悪性を抱えている身なんです。それを法蔵菩薩が全部引き受けてくださっている。うまく説明できないんですけども、ともかく私どもの意識の深いところに悪性を抱えている。

悪性と言っても、それは倫理的な意味での悪性ではないんです。唯識では「俱生起の我執」という。生まれる前からこの身と俱に抱えている我執ということです。それは唯識では未那識に当たるんですけども、上っ面の身口意の三業のところで見れば、人間には倫理的に立派な人もいれば、新聞の三

面記事に載るようなとんでもない犯罪を犯す人もいる。ピンからキリの違いがあります。けれども、どんな人も、俱生起の我執、すなわち悪性を身口意の三業の底に抱えている。その点では平等である。常識では、表面の身口意の三業の所しか見ずに、善とか悪とか言っているけれども、深く見れば、みなおしなべて悪性を底に抱えた存在である。それが人間である。仏様はそこを見ていて、それを改めよとか言わない。ただそのことに目覚めさせて、その存在をそのまま受け止める。それを阿頼那識あらいやしきという。曾我先生は「法蔵菩薩は阿頼那識あらいやしきなり」と言っておられます。法蔵菩薩が全部引き受けておられるということですね。

### 法蔵菩薩はわれらの更に下におられる

今日、参考資料としてお配りしている中にね『法蔵菩薩はわれらの更に下におられる』という最近の心光寺のホームページに投稿した記事のコピーがあります。その五ページのところ、「法蔵菩薩はいつどんな時でもつねに私の下におられて、泥まみれになって黙々と私の辛さを担い続けておられる」と、そういうことを書いています。

そして、「また、この事によって、次のことに気づかされ、再び感動した。それは善導大師の表明

された、いわゆる機の深信の言葉「自身は現に是れ罪悪生死しやうじの凡夫ぼんぶ、曠却くわうじやくより已来このかた、常に没もつし常に流転るてんして出離しゆつの縁あることなしと深く信ず」（真宗聖典二二五頁）、これは善導大師の機の深信のお言葉ですけども、それについての私なりの意識が次です。

「わが身は現に是れ罪悪生死の凡夫であり、過去も久遠くおんの者から迷いの海を常に浮き沈みしてきて、未来のその迷いの海から出る縁が全くない身であるということ揺るぎなく深く信じ、そのわが身をどんなことがあっても決して捨てずに受けとめていく」、これが機の深信の言葉ですね。

そして、「実は、この機の深信の言葉は、われらの下におられてわれらの身を黙々として支え続けておられる法蔵菩薩の覚悟の叫び声にほかならなかったのだ！」それは先程紹介した、袴田秀子さんの、弟の無実を晴らしていくことを自分の生涯にするという、そういう覚悟ですね。私は、そういう彼女の生き様に法蔵菩薩の覚悟が現れていると感じましたですね。

「そして、この法蔵菩薩の覚悟の叫び声は、われらの意識より遙かに深い所、われらのいかなる分別心も決して届かないわれらの身の本能の中に、久遠の昔から連綿として流れ続けている声だったのだ」。そういう覚悟の声。どんなことがあっても捨てずに引き受けていく、じつと止どまり続いている覚悟。言葉で言うと、そういうことになるけど、実はねもう私どもの分別の届かない深いこの身の本能なんです。それで曾我量深先生は「宿業本能、感応道交」と言っておられます。宿業を引き受

けていく魂が、誰の中にももう本能としてあるのだと。

私どもはそういう悪性とか救われない身を毛嫌いしてきたでしょう。「そんなものは嫌だ」とか、「そんなことは情けない」とか言っているのは、我々の分別なんです。分別でみるから「情けない」とか言っているけど、それが身の事実だったら分別なんか吹っ飛んでしまいます。

そして、分別なんか吹っ飛んでしまったところに、それを本当に引き受けていくことを覚悟している「いのち」があるんです。それは「いのち」というしかない。そういうものが久遠の昔からずっと連綿してこの身の中に受け継がれてきている。

「その出所は、われらの分別心が決して届かない深みからの声なのであるから私どもが自分の辛さからどんなに逃げようと思ってもそれに障えられることはないのである」。まあ、私どもは、自分の宿業の辛さに耐えられせんから、どうしてもそれから逃げようと思います。しかし、どんなに逃げても、「逃げずに支えるぞ」と、そのの方が深いんだから。

「したがって、自分の辛さから逃げ出そうと思う心を捨てる必要もまたないのである」。人間だからね、嫌だなあと思うことは勿論あります。でも、「そういうことを思っっちゃいけん」とか思う必要もない。まあ嫌だと思ってもいい。「自分の辛さから逃げ出そうと思う心を捨てる必要もまたないのである。そのような心が起こるままに、呼び声を聞かせてもらえばよいのだ」。その呼び声というのが念仏です。

念仏には二通りあると言ってもいいですね。自分の意識で称える念仏。身口意の三業で称える念仏。そういうのは上つ面の念仏ですね。それよりもっと深い、この身の本能から「おまえを生きていくからね」という法蔵菩薩の呼びかけの念仏。この念仏は分別より深いからね。

私も、今でも辛くなることが一杯あるんです。「辛いとき、法蔵菩薩は、そしてお釈迦様は、さらに、七高僧や親鸞聖人は、さらには、その法蔵菩薩の声を聞いてこられたらわれらの無数の先輩方は、私のこの辛さの更に下に居られるのだと気づかせていただく。その時、不思議にも、私もまた、この辛さを受け止めて生きていこうという意欲をたまわるのである。」

「本当の自己とは、宿業になつておられる如来です」

ある方のハガキによってこのブログを書き始めたんですが、最後のところに補足として「書き終わった後、安田理深先生やすだりしんの次のお言葉を思い起こした。」「これまで永い間我執がしゆうを自己と思つて来たでしょう。だから本当の自己が分からなかった。本当の自己とは宿業しゆくゐいになつておられる如来です」（『信仰についての問と答』）、こういうことを安田先生がおっしゃつておられる。まさに法蔵菩薩ですね。

私どもの意識は自分の人生を他人事として生きようと、それで一生を終わっていく人もいます。けれどもですね、本当の自己というのは、私どもの逃げられない宿業の身と一つになっておられる如来だと。これはまさに法蔵菩薩ですね。

「宿業になっておられる如来とは法蔵菩薩のことでしょう。これが、長い間われらが探し求めてきたわれらの本当の自己だと言われるのです。そして、その法蔵菩薩は、宿業に喘ぐわれらの更に下におられて「自身は現に是れー」と、機の深信の覚悟を黙々と生きておられるのです」。こういうようにブログでは結んでいますけども。

お念仏は、私どもの深い所から、宿業の身と一つになって呼びかけ続けている声

「親鸞さまなぜ お念仏なんですか？」ということですが、お念仏は、「本当にお前を生きていくからね、どんなことがあってもお前を捨てずに、全てを無条件に引き受けて生きていくぞ」という「いのち」の勅命、呼びかけです。思慮分別を介さない呼びかけです。それは誰の中にも深いところへ流れています。

けれども、思慮分別で生きている我々には、なかなかそれを聞けません。だからそれを、身業説法で聞かせて下さるのが善知識です。善知識は、口でもいろいろと説法もするでしょうけど、生きざまでもって、「その呼び声には私は出遇つたんです」と伝えてくださる。「あなたもどうぞその呼び声を聞いて、どうにもならんでよかつたという、そういう自分の身に帰って下さい」と、私どもを後ろから押し出してください。

親鸞聖人も、法然上人のその身業説法によって、「いずれの行もおよびがたき身」に帰る事ができたんです。法然さまのお姿を通して、生き場を失った自分に、法蔵菩薩の「おまえを生きていくからね」という声が聞こえてきたんです。それで「私はこのままの自分を生きていこう」と決着したんです。言葉ではなく、よきひとの身業説法に触れて、法蔵菩薩の呼び声に目覚めたのです。その呼び声は、外からの声ではなく、自己の内からの深い声だったのです。

生き場のなかった親鸞聖人がね、「どこかにいかんでもいい。そのまんまのおまえを待っているぞ。おまえを生きていくからね」という声を聞いかれたんです。これは勅命です。いのちの声。理性分別よりも深い所に貫いている。これが招喚の声です。招喚の声というのは、私どもの深い所において、宿業の身と一つになって呼びかけ続けている声です。これが南無阿弥陀仏です。

「引き受けるぞ。どんなことがあっても捨てないぞ」というのが、法蔵菩薩の「南無」です。

念仏とは、自分がもうすものではなく、われらの身の深い所に、誰の中にも平等に流れ来たって

るこの法蔵魂が、われらの分別意識を破って「南無」と立ち上がってくださいることをいうのですこれが念仏です。

まあ、十分にお話できないんですけども、これで終わらせていただきます。